

有名キャラ官能小説CG集第400弾!!



胸張れ私ッ! 振れー振れー天っ!

ははCGすう

HAHA CG SYU

Win
対応

Mac
対応

16 MB
Memory

1024×768
32bit Color

マウス
対応

キーボード
対応

CD-R

成年向



HAHA CG SYU

HAHA CG SYU























「ちょっとお、なんで平社（フツー）な人間がこんな…んっ、手際いいわけえっ??」

学校に潜入したはいいが、即座にパレして先生たちに捕まったパップル。
だが、追い出されるでもなければ警察に突き出されるでもなく、意外な仕打ちを受けていた。

「ほっほっほ、これはこれは…いい塩梅ですなあ？ なかなか深そうだ、しかと奥までチェックせねば」
「こんなに肉をつけて、これはよくよく確認してみなければ、何を隠し持っているやらわかりませんなあ？」
「この太ももなかなか…いや、これはもしや何か隠すために肉付きよくしているのやもしれませんよ」

身体中をまさぐり、アソコには堂々とペニスを挿入れ、完全な陵辱を行っている先生たち。
稚拙な建前としてはボディチェックだが、当然そのつもりはない。
生徒に手を出すわけにはいかない彼らの、
性のはげ口としては最適な不審者の出現は、日々の悶々とした彼らの欲求を晴らすに最適だった。
…そう、パップルはただ色々なタイミングが悪かっただけである。

「はあうんっ、あっちよ…そ、そんなに激しく…んんっ!!」

「艶めかしい声だしおって、けしからん…実にけしからんぞおっ、ふんっつう!!」

ガキな生徒とは違う脂の乗った大人の女。
壮年を中心とした先生たちには、まさにかっごうの獲物だ。
自慢の肉棒を存分にぶちかまし、
何本もの手が競うように肉をむさぼる狼の口の如く、乳房を掴んでは握る。

「くうっ! い、いつまでも調子に乗って…んじゃな…いわ、よ…っ、はあはあ…んくっ?!!」

お尻から強烈な刺激が立ち上って、パップルの動きが止まる。
背中に1本、棒でも入れられたかのように背筋が伸びあがり、
顔が上向きになって奥歯を噛み締め、ヨダレを一本垂らした。

「ほっほっほ、いい反応じゃあ。ケツ穴のほうはまるで無警戒じゃったかな？ ほれほれえ」

「んひいい!!? や、やめ…んおおおっ、そ、そんら…サビ残…はあはあ、わ、私はしてないんだけどおっ」

閉ざされているアナルを無理矢理こじあけての直腸への刺激。
それは苦しいやら気持ち悪いやら快感やらと、
ワケのわからない感覚が混ざり合って、パップルの頭を溶かす。

「おうおう、マンコの締めまりが凄まじいわい。けど、この程度じゃあまだまだ……そりゃそりゃあっ」

さすがの歳功。
彼女の膣は、最高潮にペニスを締めあげているはずが、それで射精させられはしない。
むしろ腰により力を入れたピストンを持ってして、攻勢をかけてくる。

「こ、こんらの、き、社則違反うう!! あっあっ、んひいいいっ、プレ金で早上がりしちゃうってええっ」

絶頂に達しそうになるが、その直前でアナルの指が止まる。
完全にパップルのオーガニズムを把握しての管理は、彼らがこういった事に手慣れている事を感じさせる。

「もう陥落か、つまらん」

「ほっほっほ、生徒の方がまだ粘ったものですがねえ」

「まあ良いでしょう。早々に墮としてしまえばそれだけ遊ぶ時間も多くなりますし、一発いっときますか」
肉棒肉棒肉棒。

アソコに感じる男根の存在感に、彼女の意識は集中する。
全身の快感を感じる部分が、全てマンコになったかのように絶頂に向けて総意を決する。
“最高に気持ちいい”と。
そして、全力で脳へと押し寄せてくる。その波に抗う術はない。

「あっあっ、らめええっ、こん、こんらのぜったい、ぜったいに無理、ふ、ぶっつとびいいいいい♪♪♪」

ドヴュルルッ!! ヴュルルルッ! ブブッビュクッ!!!

射精自体は年相応。なれど、そこに至るまでの女の上げ方における優れたテクニック。
ザーメンが自分の性器内を駆け巡る感覚に、パップルは最後の抵抗とばかりに奥歯を噛み締めた。
が、それが精一杯だった。
それ以上の事は何もできない。この場から脱出する事も、せめても一矢報いることすらできずに、
パップルは快樂の虜となって、残業をかさね続けた…



普段は何も変わらない、普通に過ごしているように見えても、人には誰にも言えない秘密があったりするものだ。輝木ほまれは最近、そんな秘密が一つ増えてしまっていた。

「……っ、はぁ、はぁっはぁっ……終わったなら、……もういいんだろ、わたしは帰るから」

「何言ってるんだ？ 勝手に終わらせてんじゃねーよ、たった1発ぶっこんだだけだろ輝木？」

どこの学校にも、ガラの悪いのが一人や二人いるものだ。問題は、そんな連中に秘密を握られてしまった事にある。

「あうっ！！ な、何すんのさっ」

逃げられないよう抱き着いてきて、身体ごと抑えつけられる。途端に先ほど注がれたばかりのザーメンが、股から噴き出した。

「へっへ、次は俺だ。あの輝木ほまれに突っ込めるなんて夢のようだぜっ」

ズブチュン！！

他の男の精液を蹴散らすかのようにぶち込まれたチンポは、まだ縮まってる最中だった彼女の膣道を再び開く。

「んあああっ！！ はぁ、はぁ…いい、いい、加減に…っ、こんな、乱暴にしてくれちゃってっ」

「おっと、いいのかい？ バラしちゃってもさーあ、…秘密をよー？」

「っ！！ ………く、…う」

ニタニタしているのがまた腹が立つ。彼らに弱みを握られたのが運の尽き。ほまれは押し黙るしかない。

「ははっ、そうそう。大人しく犯されてくれてりゃいいんだよ、そうやってなあ！」

「んつく…はぁ、はぁ…何を…あっあっ、う…！」

ほまれが従う姿勢になった途端、彼らの行動はエスカレートしはじめる。彼女を仰向けにし、大きく開脚させて結合部が丸見えの恰好にさせた。

「丸見えだぜ輝木？ ズッコンパッコンと出入りしている様がよーく見えらあ、ははははっ」

「くっう！ …最低、はぁはぁっ、アンタたちは…っ、最低だよっ、んっあっ、くふっう！！」

マンコを出入りするペニスと尿道の膨らみもパッチリ見せつつ、結合部より前の奴の精液をかきだしては飛散させている。セックス中の生々しい結合部の様子に、番を待つ男たちのノドが唸った。

「た、たまんねえなオイ」

「見るよあの細い腰、脚もスラッとしてよ…こんな女、他にいやしねーぜ」

頭の中で同級生の女子達と比較しているのだろう。

確かにほまれの肢体は、同じ年頃…

否、他の年齢の女性と比べてもその造形たるは非常に優れている。

女体における美とは、こういうやつなんだと彼らは確信し、そして自分達の幸運に感謝する。

「そら、そらっ、これから俺達でチンポズッポシやってやっからよお、よろしく頼むぜ輝木っ」

「これからなんてっ、はぁはぁっ、あるわけ…ないっ。んぐっ、ふーはーっ、これっきり…に、きまって…んんっ！！」

だが、そうはならないだろう。

彼らがほまれの秘密を掴んでしまった以上は、ずっと脅され続ける事になるのは彼女とてわかっている。

それでも、それでも気持ちまで折れて、こいつらの言いなりに完全にはなりたくないという反抗の意志を見せる。

「そう嫌がるなって、そのうちクセになって逆に離れられなくなるからよー。

それまでしっかりと俺らのチンポの味、覚えさせてやんぜ！！」

「はぁっはぁっ！ そ、そんなもの誰がっ、…覚える、わけっ…あっあっ、んんん、くうううううっ！！！！」

ビルッ！！ グビュッグビュブッ！

頭の片隅にピリッとくるものがあるが、幸いな事に彼らの射精は、さほど多くはない。

なので、ほんの2、3秒足らずでオーガズムの波はおさまってくれる。

だが、頭が真っ白になるほどでも、性欲に溺れる事もないとはいえ、

それでも彼女の身体が快感を感じてしまっている事実には変わりはない。

「ふーう、たまんねー。じゃ、交代だな」

「おうよ、待ちわびたぜ」

男達は割とあっさりと仲間にバトンタッチする。

その理由は、この調子ならば堪えきれると考えているほまれには理解できなかった。

……彼らは、まだ本気で彼女を犯してはいない。

まずはとりあえず駆け付け1杯とばかりに軽く1発ずつ中出し決めていく、いわば序の口にすぎないという事を、ほまれは気づいていなかった。

本格的に、輪姦の輪がまわりはじめた時、彼女が耐え抜けるか否かはまだ、男達にもわからない。



「サンプリング開始、2人の体調・周期は良好と推測。行為に対する疑義を抱いた様子はなし」

ルールーは、まるで感情をたたえることなく冷淡に2人を観察していた。

「はぁ、はぁ、んんっ！ い、いけないわこな…あつあつ、ああんっ！」

すみれの発した言葉は拒絶ではない。強すぎる快感を我慢するために咄嗟に出たものだ。

「はあうん！ だ、だめええ、こんなの、こんなの気持ち良すぎてっ…あつあー！！」

良い感じに行為に慣れてきたこと。男達のチンポへの恥じらいや拒絶感は少なくなっている。

更なる学習のためのデータ収集。

この上なく順調に進みそうだとルールーは満足気に、しかし表情を崩すことなく、

彼女達をよりつづさに観察してゆく。

「はぁ、はぁ…あふんっ！ そ、そこは弱い…あまり、あつあつ、そんな風につ、しないでえっ」

すみれの中の男根が、その先端を押し付けている場所は子宮口……ではない。

ややズレた、深い位置の膣壁の一部だ。

「情報によると、性感帯…と呼ばれる部分と判断。

刺激により、野乃すみれの快楽値が大幅に上昇している…」

アンドロイドゆえに、そこまでの造り込みは自分にはなされてはいない。

生身の女性でなければ、彼女にはこうした情報をつかむ事ができないのだ。

「やああつ、あ、んっ、あつ…も、もうあそこが…あそこがいっぱい…、んあつ、あああん！」

ことりの身体に対して男の性器は大きすぎる。それは事実だろう。

しかしそれでも、彼女の性器は男根を飲み込みきっている。

「膣腔の伸縮力…、想定以上。古いデータを更新しないと」

おそらくはこのくらいは伸縮するため、

男のペニスもこの程度までは挿入する事だろうという事前の予想は外れる。

およそ深さ2cmから10cmにまで伸びたことりの膣は、ルールーを大いに驚かせた。

「個体による差異の検証の必要がありますね。次はもっと大きなペニスを有する男性の用意を検討」

しかし、そうはいかないかもしれない。

なぜなら二人は、どちらも妊娠可能な状態でセックスに及んでいる。

さすがに懐妊してしまつては、こういう事を“させる”機会は減らす必要性があり、ルールーは少し悩む。

「はあんっ、はあつあつ、あつあ！ できちゃう、出来ちゃううっ、3人目が…ああつ、孕んじやううっ♪」

すみれの喘ぎ声から、着想を得る。

「サンプルを増やす手はずを整える……ありますね」

それならば二人が妊娠してもなんら問題はない。

なら、心おきなく妊娠してもらおうと、ルールーは無慈悲に男達に二人への種付けを行わせる。

「はひっ、ひっんん！ だ、だめえっ、わたしっ。まだ、まだっ、…なのに赤ちゃんできちゃうよっ」

「あつあつ、ことり、ことりいっ、んんん！！ お母さんも、はあはあ、デキちゃうっ、うううっんん～っ♪」

ビクビクンッ！！ ビュルビュルビュウウウッ！！！！

まるで蛇口をひねって水が出るかの如く、男達のペニスは射精する。

ルールーの洗脳に従って、

彼らはこの場にいる事も、どこの誰とも知らない女性二人とセックスする事すらもなんら疑い持たずに遂行する。

必要に応じて都度、上書き洗脳され、都合のいいように用いられる彼らだが、

その遺伝子は確実にすみれとことりの胎内へと届き、彼女らを孕ませられるのは、男としては幸せな事だろう。

ルールーは決して、彼ら彼女らを不幸に導いているわけではない。

むしろ自分の目的を遂げるとともに、彼らも幸せにしているとさえ思っていた。

「……あ、いけません。ことりさんの方は少々問題がありますが……ならば……」

「双子かぁー。よかったなはな、ことり、新しい妹たちだぞぉー」

すみれは新たな命を産み落とした。

いわゆる“二卵性”双生児……双子だ。

「わー、……あれ？ なんだろ、…なんだかヘンな感じが…うーん??」

ことりは何か引っかかりつつも、まいったときほど気にせず、生れたばかりの妹たちに話しかけている。

「記憶変更、および受精卵の移植も問題なく成功……」

「ん？ ルールー、なんか言った??」

「いえ、何も。“お二人”に似ていますね、と独り言を呟いただけです」



「ふっふっふう、さすがのオレちゃんも驚いたぜ、こんな事になるなんてな」

端役の小さな仕事で渋々だったチャラリートは、今はこの仕事を受けた事を逆に喜んでいて。

「…っ、わたしも…んく、はぁ、はぁ…こんなところで会う事になるなんて、思ってもいませんでした」

さあやは気丈さを保とうとするが、色々とショックが大きくて平常心を保つ事ができずにいた。

初めての母との共演、という話を聞かされ、

最初はこんなに早く実現するなんて…と驚きと喜びに沸いたものだ。

しかし、そんな母れいらの顔は暗かった。なんて事だと、この世の終わりが来たかのような顔をしていた。

そして、母から前日に薬を渡された。ちゃんと服用までさせられて。

「ううっ、くふ…んっ、はぁ、はぁ…大丈夫、大丈夫…お母さんと、…はぁ、はぁ…一緒、なら…っ」

今、股には雄々しい男性器が突き刺さっている。

これは仕事ではない。業界の暗い噂としてよく上がる“枕”である。

「…この、事だけは…はぁ、はぁんっ、あなたに…知って欲しくはなかった、けれど…っ」

れいらは苦渋の表情で男の肉棒を前後の穴で受けている。

しかし、苦痛を感じているという様子はなく、犯されているその動きもスムーズだ。

それらは“これ”が初めてでない事を物語っていた。

「お、お母さん…へ、平気、私はっ、こ…のくらい、はぁ、はぁ…全然平気だよ…んんっ」

「さ、さあや…っ」

仕事と称して呼ばれたのがまさかこんな事のためだとは思ってもよらなかったであろう我が子。

れいらは、本当ならば自分が成熟しきって出演者をアゴで使える立場になりたかった。

そうすれば娘が自分の後を追いかけて業界を走ってきても、“こういう事”から守ってやれると。

だが、現実是非情だと痛感させられる。

「んぐっ、はぁ、はぁ…こうなった以上…仕方のない事…いい、さあや？ こういう時はね…こうするのっ」

れいらは、表情を一変させる。それは男を狩る、強い女の顔だ。

しかしそれが母の素ではなく、そういう役に入りきっている事をさあやは直観した。

「はぁっ、はぁっ、この程度で…私をどうにかできると思ってるのかい?!」

悦の入った、しかして男に媚びない女王様的な囁きと、

自ら力と速さがよく入った腰使いで男の肉棒を、逆に自らの穴へと飲み込んでいく。

相手の男の表情から余裕が消え、屈服に向かう悶絶へと変化する。

「はぁんっ、んっ、ははっ、もっと動いてみせないと！ この薬師寺れいらを墮とそうなんておこがましいっ」

「（すごい、私はまだあんな風には…）」

この状況を、自分の本音はひとまず差し置いておき、ネガティブではなくポジティブに捉える。

演じるはチンポ大好きな強い気力の女。

むしろ男にさらなるものを要求し、快感を与えよと圧する態度を取る。

物理的には俄然有利な男達なれど、れいらの気迫がその優劣さえも覆している気がした。

「そうだ、その腰使いっ、もっともっと、ガンガンとやれないの!!!」

乳房を大胆に震わせ、恥じらいを捨ててかかる。

経産婦とは思えない締まりで、2本のチンポを手玉に取る。

精神的に弱さを見せる事なく、男達を煽り、己が身体をフル活用して行為に没頭する。

見られて憚られる全てを振り切って、不貞なるセックスに酔いしれる！

「そう、来なさいっ、そのみじめで我慢知らずなチンポから、せいせい矮小な遺伝子を植え付けにきてみなさい!!!」

ドグルッ!! ブブッ! ビュービュービューッ!!!

マンコに、アナルに、そして顔面に。

夫以外の精液で織られていく母。だがそれでも彼女が本来の自分を僅かたりとも出すことはない。

「…この程度でまさか終わりじゃあないでしょうね？」

突っ切る。心をすり減らしながら、覚悟の女優が卑劣にして卑猥なる現場を、一切踏みとどまることなく。

見知らぬ男達に貞操を奪われ、まだショックから立ち直りきれていないさあやにとって、

それはなんと頼もしい姿であっただろう。

だが同時に、母が心では不貞に泣きじゃくっている事も感じ取れる。

全ての事が終わって男達が居なくなった後、強き母は娘の前で崩れ落ち、子供のように泣きじゃくった。



「(余計なおまけまでついてきちゃったが、結果オーライか)」
「(だな。せいぜい楽しませてもらおうぜ。どうも頭の方はお花畑みただけだからな、こいつら)」
男達は最初、計画していたのとは違う想定外の事態に慌てた。

「はぁ、ふう……股が、熱いです。温度上昇、食欲に近似する感覚と推定……はふう……」
それは、愛崎えみるの誘拐計画。
ところがいざ実行に移すと、もれなくルールーがついてきてしまったのだ。
仕方なく、そのまま計画通りに押し通し、適宜アドリブを踏まえた結果、なんだかんだで上手くいっている。

「はぁ、はぁ…もうそんなに入らないのです、…んっ、ふあっ、あっ！」
「(身代金の要求はできたか?)」
「(バッチリだ。しかし即答だったのが気になるが…まあ、愛崎俳吞は変わり者だという噂もあるしな)」
えみるの家への身代金要求もつつがなく行われ、後はあちらからの連絡待ち。
その間はただひたすらに二人を犯して楽しんでいければいい。
あまりに上手く事が運びすぎて、男達は多少の引っかかりを覚えつつも、深くは考えなかった。

「へへ、楽しんでもらえてるようで何よりだ」
「はぁ、はぁ…な、なんなのです、皆さんは?? わたし達をどうする気なのですかっ…」

「へへ、さあね。…けどまあ一つ確かなのは、だ。
このまま1時間ほど、俺らと楽しく遊んでくれてりゃ、家にや帰れるぜ」
いいなら、男はチラリとルールーを見た。
愛崎えみるは肉付不足でペドい趣味の仲間以外は手出ししづらいものがあるが、
想定外で一緒にさらってきたこの女は、なかなか悪くない。男の食指が向く。

「はぁ、はぁ…んくっ、…腔内の…男性器は、温度が上昇……けど、まだ…射精に至る可能性…44%」
二人は敵意こそ見せてはいるものの、存外大人しい。
抵抗もさほどしないし、ひん剥かれてチンポをぶち込むのだって容易く行えた。

「(俺らに囲まれて、脅えて何もできない…って感じじゃあねえんだよねあ
…なんでこいつら、こんなに余裕あんだあ??)」
「ひゃうっ、あんっ、やつあっ、それっ、以上っ、はっ、はいっ、らないっ、のでっ、すううっ!!!」
「…右手…温度急上昇……射精する確率、70%……射精物がえみるに当たる…
んっんっ、う……角度修正…、射精までの時間も、…要微調整……はあはあっ」
悦んでレイプに応じている、実は羞恥心のないヤリマン——という風にも見えない。
とにかく犯されているというのに、ショックをそれほど受けているように思えないのだ。
この年でもうそれなりに経験がある、とも思えないし、
そうであったとしても同意の上でなく、誘拐された上での一方的な強姦にあっているには焦りも不安も見られない。

「(考えすぎか…? それとも…)」
「ひゃあんん!! もう、もう中には入らないのですっ、さっきから言ってるじゃありませんかっ
もう精液とおチンチンで満タンなのですよ!!」
「はーはー、…んんん、大きさ……直径5.2cmに増大……温度、さらに上昇…んっんっ
3本のペニスが、射精率同調、90%…調整は完了……予測だと…んっんん、あと…4.6秒です、えみる」
「はい、わか…ったのです、はあはあ、ルールーも…準備、するのですよう」
その直後、小さな彼女のマンコがキュウツとすぼみ、男のペニスを搾り上げた。

「はぁ、はぁ…えみるの腔の圧着運動を…観測…、んっんっ、女性器ユニットの収縮レベルを上昇させます…んっは、あっ」
「あっあ、き、きちゃうのです! おチンチンからまた精液がっ、わたしの中に出されちゃうのですっ!!!」

ビュウルッ!! ビュグッビュビュッ! ドグドグドゴポポッ!!!
小さすぎる子宮は、男の精子を受け止めきれず即座にザーメンを噴きこぼしてくる。
ルールーのマンコも、中出しザーメンを10cmほど飛ばして何度も排出していた。

「もうこんだけやったらデキちゃってるかもなあ、へへへ」
「まっ、金持ちなら処置も簡単だろ? デキてたら産むなりおろすなり好きになっ、はははっ」
「……その心配は、少なくとも私にはありませんので、…えみる、あと5秒です」
ルールーが、セックスの熱気から早々に覚めた、なんとも冷淡な声で告げる。
それを受けてえみるが、すうーと息を吸い込んだ。そして…

「3、2、1……到着、です」

「いや—————、だれか助けてええええなのです—————うううう!!!!!!」

ルールーは、発信により自分の位置を他の皆に報せていた。
当然、駆け付けた他3人のプリキュア達によって、誘拐犯は全員ぶちのめされた。

「上手くいったのです! 囮作戦、大成功なのです♪」
ルールーの情報分析の結果より知った、金持ちの娘としてえみるの誘拐を企んでいる犯罪者の存在。
えみるは自分をエサにして、それらを捕まえる作戦を立てていた。

「ですが、大丈夫なのですかえみる。あんなに中に……」
「平気なのです、避妊薬はバッチリ飲んでおきました! それに、こう見えて経験豊富なのですよ♪」
金持ちの娘であるからこそ、あるいは“人付き合い”は幼い頃よりあったろうし、重要事だった可能性は高い。
えみるは多くを語らなかつたが、もしかすると言いたくないような経験もあるのだろう。
ルールーは、そうですか、と短い相槌のみで切る事にし、それ以上深く聞く事はしなかつた。



ビュググッ！！ ドクンツドクドクウツ！！！！

容赦のない中出し射精を、ほまれは強く目をつむって耐える。
だが射精を終えてペニスが自分の中より抜け出た後、堰を切ったように呼吸を乱した。

「はぁ、はぁ…も、もうムリ……わたし、でき…ない…っ」

「何を言う、まだほんの3発目じゃないか輝木！ 大丈夫、お前はまだまだやれる！！」

そういう問題じゃないと、ほまれは思っていたが、
ケガで迷惑をかけたという負い目から言い出せずに飲み込んでしまう。

「よし、ならばこうしよう。お前は一切動かなくていい、そして——」

コーチが何か合図を送ると、それを受けて先生が頷き——

ズブウウツ！！！！

「ひぐうう！！？ い、いたい…っ、な、何を…せんせえっ??」

尻穴への挿入。
そしてそのまま寝っ転がり、大きく開脚した状態で、
ザーメン噴き出すマンコをコーチの前に提示する恰好にされる。

「これでお前の身体は固定された！ マンコには私が動いてやる！

輝木は何も心配せず、安心して受け入れるんだ全てを！！」

「そ、そういう…こと、じゃ…ないと、思うんですけど…あっ、ん…んんんん、うううっ！！」

さすがに前後の穴への2本挿しは苦しかった。
内側からの圧迫感が、呼吸器を全て封鎖したかのような苦しみを感じながら、
ぶっといチンポをそのマンコで受け止める。

「くううう！ 素晴らしい締めりっ、問題ない…足も治っている、お前はまだまだやれる！！」

「はぁ、はぁ、な、何をですか…っ、ふんううう?! いっ、あっ、んはっ、そ、んなっ、いき、なりっ…」

猛烈な腰使いでせめてくるコーチ。
チンポどころか、全身をマンコの中へとねじ込まんばかりの勢いに、
華奢なほまれの身体はぐいぐいと股間から頭の方へ向かって押される。
だがアナルにもう1本、チンポがハマられているおかげで、身体がズレ動くこともなく、
コーチの衝撃を逃がす事もできずに、受け止めさせられた。

「はぁ、はぁ…ひっ、い、こ、こんな…む、無理…壊れる、壊れてしまいますっ、あっああ！」

「大丈夫だ、人間の身体はそうやすやすと壊れたりはずせんっ、耐え抜け輝木い！！」

ズゴンバゴンと、全力で犯してくるコーチは、
口からヨダレを垂らし、半ば精神がイッちゃってるかのような表情を浮かべながら、ほまれを犯す。
細くて若いその身を、媚肉を通じて自分の全てで染め上げてやろうという欲望。
ぶっといチンポが、ますますデカくなって、ほまれの膣と子宮にギチギチに埋まる。

「ひあんっ、はあっ、あっあっ、んんんん！！

やっ、だ…だめ、コーチっ、もうやめてっ、こんなの、こんなの私っ、いや、もう…いやっ」

「なんてことを言うんだ輝木っ、そんな事は許さん、許さんぞおむっふー！！

お前はもっともっとやれる！ やるんだっ、この俺とおおおおおお——！！」

猛烈な、私的な感情を込めた一撃が彼女の子宮奥深くを突く。そして…

グビュグビュグリュルルルツ！！ ビューツビューツ！！！！ グブボボツ！

「いやあ——っ！！ んんんん…！！ …う～～～ツツツ！！！！」

中出し。
狭く小さかった膣が、しっかりとチンポを飲み込んでしまうほどに拡げられ、
深いところで撃ち込まれるのが常態化してしまったほどの。
ほまれにとって、こんなコーチでもスケートを止められなかったのは、
コーチの尽力あればこそだった。
しかし、そんな恩義の気持ちももはや限界。
ケガが治ってもほまれは、もはや滑る気を喪失したまま、再び燃え上がる事はなくなった。

「…あのコーチは罷免された、もう大丈夫なんだよ輝木！ だから戻ってこい！」

しかし先生の言葉にほまれは首を横に振ってNOを示す。
あの場にいた先生も結局はコーチを止めなかった。
それどころか加わって、いろいろとやった内の一人だ。
第二のコーチとなる可能性は非常に高く、ほまれは二度とあの世界に戻る気はなかった。



「あっあっ、んんっはあっはあっ！ い、いっちゃう、またいっちゃうよわたしいっ！！」

キュアエールが、もうダメだとばかりに唾液を空中に飛ばしながら仰け反った。

その瞬間——

ビュグルルルルッ！！ ドクッドクウッ！！！！

容赦のない中出し。だが不思議と嫌な気はしない。

本当はいけないと頭では思っているはずなのに、それが曖昧になって霧散していってしまう。

「はーはー、は……は……、ま、またいっちゃうっ…はあはあ、こんなの気持ち良すぎて…無理…だよお…」

困惑。エールの表情に浮かぶのは、

自分が置かれている状況の良し悪しも判断がつかないほどのモヤモヤ感。

いった瞬間は、素晴らしい快感と心地で晴れ渡ったはずの頭に、

セックスの終了から1秒、2秒と時間が経過するにつれて沸き立つ気持ち悪さに困惑していた。

「くうんっ、はっはっはっ、んあっ、へ、ヘンな声…出しちゃうっ、はーはーっ、こんなはず…わたしはっ…ああっ！！」

エトワールが悶える。普段はあまり見ないような、女の子らしい雰囲気が出ています。

その股をチンポがズコズコと出入りしていて、

それはそれは同年代の女子からすれば見たくない、陵辱中の光景。

…のはずが、本人も戸惑いつつも気持ち良さに酔いしれ、

行為も男性器も、既に受け入れてしまっているようだった。

「ああんっ！ ふ、深く…て、お、おつきいですのっ！ あんっ、あんっ、あーんっ！！」

なんら躊躇なく喘ぐマシエリだが、この状況をおかしいと思っていないわけではなかった。

だが、とにかく気持ちがいい。凄まじく。

冬の寒い朝、起きなければ出なければと思っているお布団の中に籠るあの心地よさ。

それを何倍にもしたような気持ち良さが、ペニスで深いところを突かれるたびに生じるのだ。

股を閉じる理由も、男を嫌悪し、拒絶する理由もない。これだけ気持ちがいいのだから。

「はあ、はあっ、お願いですマシエリ…あ、脚を…脚を離して…このままでは、ああっ」

マシエリに片足を持ち上げられ——いや、しがみつかれて強制開脚状態にあるアンジュ。

チンポがスムーズにその股の中央を出入りする。

こんな格好は恥ずかしいはず、なのに無理に身体を動かしてマシエリも男も振りほどく気がおきなかった。

「あっあっ、ううう…こんな、こんなはず…は、はあはあ、一体私たちに何を…くううんん！！」

もっとも正気を保っているのはアムールただ一人だった。

それでも身体がいう事を聞かない。

他のプリキュア同様に男に犯されるだけの状態になってしまっている。

しかもアンドロイドの身体に、快感など感じるはずのない行為でどっぴりと感じてしまっている。

「はあはあ、み、…んなっ…んっん…あああっ、こんな、はずじゃ…あっあっ、んんっ」

エールは喘ぐ。

まだ仲間を案じる事はできても、もう彼女にこの快樂の時を脱却するだけの気力も意志もない。

何度もペニスで子宮をひしゃげさせられ、すっかり身体が覚えきったセックスの味。

それだけのために存在し、それだけのために呼吸をし、それだけのために生きている。

そんな馬鹿げた事が、彼女の真実となりはじめている事にさえ、恐怖を覚えない。

犯される。犯される。犯される。

射精がくる、中出しされる、気持ち良さに満たされるっ

「あっあっあっ、ま、またいっちゃう、わたしっっちゃうううっ！

い、いやっ…なんだか、なんだかわかんないけど、いっちゃうよおおおお———ツツツ！！」

ドチュドギュドクゴググッ！！！！ ドクブグブブリュユッ！！！！

逃れられない運命。

既に自分が堕ちている事にも気づかず、気づけぬままに中出しされ続ける。

子を孕む事もない。年老いて飽きられ捨てられる事もない。

時間は永遠にこの時を保っているから。

彼女達は永遠の快樂の中で、美しいままに溺れ続ける。



「んっう、こ、これで本当に、はあ、はあ…いいのです…？」

キュアマシェリはさすがにちょっとおかしいようなと思いはじめた。言葉巧みにかどわかされた事にも気づかず、二人して素直に応じた結果、その二人のマンコには今、男根がしっかりと突き刺さっている。

「大丈夫大丈夫、いいよー、すごく！ ウチは大助かりさ！」

「そうですか……なら良いのでしょう、マシェリ」

キュアマムールも人のいい事を言っているが、不可思議に思っていないわけではなかった。それでも普通の一般人に、プリキュアの力でどうこうする事は憚られるし、何よりアムールはどんなに犯されようともななら問題がないだけに、事の重大さが理解できず、現状を分析しようとさえしなかった。

「うう、そ、そうなのですか…んっ、はふっ！ け、けれどもこれは…ちょっと、つ、辛いのですっ」

苦痛がキュアマシェリの股を支配する。

初めてを失ったという自覚さえ、彼女にはない。

知識はあっても、経験やそういった下の話なんかも疎遠であった、故の無知。

自分が先ほど失ったものが、乙女にとってどれだけ重いものであるのかすら、わかっていない。

「(いいですねえ、まさかあのプリキュアで撮影できるなんて)」

「(社長、すごいですよ)」

「(そうだろそうだろ。だが気を付けろ。)

この二人…どうやらコッチ方面の事を知らないようだからこそやれたんだ、ヘンな事言うんじゃないぞ！」

スタッフ達の間で、即座に社長の言葉が共有される。

二人への対処や会話を間違えないよう、気を配らなければならない。

でなければ、いかがわしいものとバレた瞬間、自分達なんぞ一気に蹴散らされてしまうのが目に見えている。

「よーし、マシェリちゃん。もう少し我慢してー、大丈夫、数分で済むからねー」

「は、はいなのです…んっ、ううう！ う、動くのですか??？」

「大丈夫、直に痛くなくなってくるから…ね？」

ニコッと笑うのは相手役の男優。二人になるべく警戒心を与えないよう、見てくれのいいのが選ばれた。

そのおかげもあってか、キュアマシェリはコクンと脅えた小動物のように小さく頷く。

「ひゃあっ、あっあっ?! んんんん、はあ、はあ…す、すごく…奥の方が、じ、じんじんするのです…っ」

「そう、なのですか?? こちらはそういう感じは…ん、あまり致しません…」

キュアマムールは余裕だ。困惑気味ではあるものの、苦痛が顔に出ていない。

男がどんなに腰を強く、あるいはちょっと乱暴気味に振ってピストンさせたとしても、

反応に大きな変化は見られない。

「(不感症か?? へへ、ならおっかなびっくりやる必要はなさそうだな!)」

「っ！ 腰の力が…2秒前より27%急上昇。んっ、…中が、深く押し込まれます…」

細部まで完璧な造りとはいえ、女性器まで完璧かと言われると、やはり本物には叶わないだろう。

それでもオナホールより数段高精細な造りのアソコは、人工名器なれど男のペニスを必要以上の快感で包む。

「くおおお!! やば、逆襲され…で、出るっ!!」

「お、おいおい我慢しろ！ まだ撮れ高足りないぞっ」

一方で、キュアマシェリの方では違う意味で相手の男は射精の危機に瀕していた。

「あうう！ い、痛いのです…っ、ぜ、ぜんぜんおさまりませんっ、はあはあ、ぐすんっ」

キュウウン!!

心臓をめった刺しにするのは、良心とキュアマシェリの愛らしさ。

早く終わらせてあげたいという気持ちで、彼のペニスに射精を促してしまう。

「お、おいおい！ ちょっとちょっと、お前らどうしたんだ?! そんなに二人は名器だったのか??？」

「ふあああん！ も、もう痛いのやなのですっ、はあ、はあ…はやく、はやく終わってくださいなのですー！！」

ズビュルルルルルルルッ!!!! ビューツビュビューウツ!!!!

キュアマシェリの叫び声が合図となって、男優二人はイってしまった。

「なんだかよくわかりませんが、お金をたくさんいただいたのです」

「よかったですね、……ですがどうしてでしょう、理由がよくわかりませんが」

「ルールーが男の人をたくさん気絶させてしまったからなのでは？」

「だとしたら、悪い事をしてしまいました。てっきりそういう事をするものだと思ったので」

あの後、ルールーがなるほど我得心したりと、

片っ端からその場にいた男達のペニスを又いていき、スタッフ全員全滅。

監督から、コレあげますんでお引き取りくださいとばかりに、超厚手の封筒を貰ったのだった。

「ですがこれは、いくら入っているのでしょうか、計算してみます」

「えみるのお年玉の半分くらいの厚さなのです。…200万円くらいじゃないですか？」

自分達がされた事に、一切悲観する事もなく、二人は和気あいあいと話ながら帰っていった。



「へえ〜、よくできてるわねえ？ こおんなところまでリアルに作り込んであるなんて」

ジェロスは興味深そうにルールーの乳房をまさぐる。
その感触、その柔らかさ、その形に温かと、
アンドロイドと知らなければ、まさか作り物だとは思わないほどリアルな胸。

「…く、う………私に、…何を、…し、た…の、です…か…」

その問いは、自身の股座に男根を挿入している卑猥な行為に対してではない。
意識はあるのに身体がまったく動かせない不可解さの答えを求めてだ。

「フフン、簡単なこと……ちょこっとプログラムを変えるウイルスを仕込んだの、ただそれだけ」

だがルールーの機能には、そうしたものから自身を司るシステムを守り、保持するものが備わっている。
並みのウイルスではどうこうできるはずはないと、ルールーは怪訝そうにジェロスを睨む。

「んは…あくっ！ …はあ、はあ、これ、は…なぜ、…こんな、っに…んっんん！」

「アンドロイドなのに人間並みに感じちゃう、なぜなのってところかしら？」

フフフ、貴女の生みの親が面白いものを作っていたのを頂いて、
少しばかり手を加えたものを使わせてもらったのよ」

「な…、んっ、…うあっ、あ…んんん！ はあ、はあ…これ、は…んっんんっ、反応…感度値が…んああ！」

ルールーは、アンドロイドとはいえ限りなく本物の人間に近い超精巧な造りをしている。
当然、五感機能も搭載されてはいるが、生殖能力がないアンドロイドゆえに性感帯機能は備わっていなかった。
ところが、心までも本物の人に近しいものを有するようになった彼女に、
トライウムがそれを後押ししようと思かんに作っていた、
女性として身体に関する知識と羞恥心を正しく身に着けさせるための軽めの修正パッチ。
それが改悪され、ルールーに適用された結果……

「んあああっ！！ は、あはあ…こ、んなに…見えない、男性器を…感じるだなんっ…て…んんん！」

疑似女性器の感触で挿入されているペニスの全てを感じ取る、色狂った娼婦並みの感度を与えられた。
それは肌の表を軽く指でさするだけで、運動機能の全てが麻痺してしまうほどの感覚反応を生じさせる。

「フフフ、抵抗できない？ とんだアンドロイドもいたものねえ、チンポをぶち込まれて悦ぶだなんて」

「否定…しま、す…っ、う！ …っ、はあっはあっ、これは…しす、てむの…っ、いじょ…おおっ？！！」

ルールーの全身が微細にふるえる。
ジェロスが掴んでいた乳房が暴れて、彼女の手を一度弾いたが、ジェロスはすぐに掴みなおす。

「説得力ないわねえ？ 今何回いったのかしら、2回…いや3回はイっちゃってたわよねえ？」

「…っっ！！」

悔し気に閉口するルールー。その態度を見て、ジェロスはご満悦に笑む。
なんて楽しいのか？

アンドロイドとはいえ、若い女の子を虐める楽しさは、
あるいは自分が年を取ってしまった証拠なのかもしれないと、心中で感情は目まぐるしく動く。
そんなかすかに湧いてきた若さへの嫉妬心が、さらなる加虐へと彼女を駆り立てる。

「…っんはあ！！？ んっ、あっ、ふあっ、…ぐ…うううううううっうー…ツツ」

「ほらほら、いきななさい。もっともっとイっていいのよ？ ほら、ほらあ、みともない顔見せて見なさいよお？！」

乳首を思いっきり引っ張る。それだけでルールーがいったのを見逃さない。
だが休ませない。男根でマンコをほじられるだけなのは勿体ない。
こんなにイキやすいと責め甲斐があってなんとも面白いものだ。

「ほらあ、ほらあ！ こんなにオッパイ歪めちゃってえ！ このまま中に出したらどーなるのかしらあ？」

アンドロイドでも妊娠とかしちゃうのかしらねええ！？ 実験してみましょうよ、ねえ！？」

「そ、そんなこ…と、んんっ、はあ、はあっ、あつあ、…うう、…つっ%""!!!#""*っtttq!!!!」

ドクルルッ！！！ グブグブッ！！ ビューブビュールッ！

真っ白になった。ザーメンによってルールーの膣だけでなく、その頭までも。

「…どうやら自己ショートして自分で機能ストップしたみたいねえ。

クス、それで逃れたつもりかしら？ むしろまな板の上のコイだわ」

さらなる悪改良を施し放題。

ルールーの危機は、よりこじれた方向へと進み始めた。



「んおっ、ふうぐっ！ はっはっ、ふーっ、はっはっ、ふーうっ！！」

「え、エール…それはなんか違う…気がっ、んっ、はっ、んんっ！ くっ…」

自身もかなりいっぱいいっぱいながら、キュアエールにツッコミを入れるエトワール。そこにはこの現状を考えないようにしたいという現実逃避も含まれていた。

「はぁ、はぁっ、はぁ、はぁっ……もしかして、ひっひっふー?? 有名な出産の時に呼吸法だね」

アンジュも乗る。だが二人に比べてどこか余裕があった。

「そうそれっ、はぁ…はぁっ、ちょっとは…んくっ、ら、楽になるかなーって…はぁ、はぁ」

男達のチンポを啜え込んだマンコは、どちらかという出すより出されるのが今だ。残念ながらその呼吸法に意味はなく、二人を軽く呆れさせる。しかしそれが有難い。もしエールがこの場にいてくれなかったらと、アンジュとエトワールは思っソツとした。

「と、とにかく頑張ろうっ、これもはぐたんのためなら…んっ、んっ…耐え抜いてみせるっ」

「そうだね…ぐっ、う…はぁ、はぁ、なんとか、…いけるだろうし」

これまでの経過と自身の体力面などを勘案して、エトワールは乗り切れると踏む。

「うん、そうだね…っ、ん！ …はぁ、はぁ、少し慣れてきた、気がする…多分だけど…」

キュアアンジュも、なんとかかなと考えていた。

けれどもとにかく、自分達のアソコを貫くペニスが、大きく、太く、肉々しく、そしていやらしい。ただ挿入れられて上下に蠢いているだけなのに、体力気力が削られていく。

「んっ、んっ……はぁ、ふうっ、ドリルより……猛烈、かも…しれない…っあっあっ、んんん〜っ！」

まさか回転するドリルをアソコに入れた事はさすがにないし、しないが、イメージとしてキュアアンジュに彷彿とさせるのがソレだった。

「はぁうっ、あっあん！！ やだ、ヘンな声だしちゃうよ…」

「くっ、はっ、んんっ、ちょっと…いい感じになったような??」

キュアエトワールのアソコが、チンポの捉え方を変え始める。苦しみの中に、気持ち良さが混じりはじめ、それが不意に苦痛を抑えて前面に出てくる時がある。そういう時は、意図せず声が出てしまう。それが途方もなく恥ずかしいが、抑えられない。

「はー、はーっ、ううん！！ だ、大丈夫…まだ、まだっ、こんなの、全然へっちゃら——んひっ?！」

その瞬間、エールの子宮が躍った。ポンッとチンポが突き上げてきて、内臓が玉つきで下から上へと圧していく。込み上げるものはなかったが、込み上げてきたような気がして、モノなき吐しゃの如く、息を吐いた。

「あ、ありえねえっ、はーはー、こ…こんらに…ふ、ふきやくまれえ…んおっ、おふぶっ！！」

相当にキていた。チンポがエールを墮としにかかっているのは明白で、彼女の意識が飛びそうになるところギリギリで弄ぶように、ペニスが正しいタイミングで突き上げてくる。

「んうっ、ふがっ…おっ、あっ、んっ、はっ、ふああっ！！ こ、こんらの…ひ、ん…じゃううっ」

何度も飛びそうになる感覚。子宮が降参の旗を振りながら、子宮口を開いていく。キュアエールの胎内を龟头が覗いて、そして——

ビチャルルルッ！！ ブグブグドググウッ！！ ブグググブウッ！

「んはあああああ——??!! な、中がめちよくよおおっ、あっあっひっ、い、な、なんか飛んじゃふうう?！」

意識がこねくり回される。射精物が胎内を巡るように。だが、気持ち悪さはない。ビックリするほどの多幸福感に酔わせられる。

そして、気が付いた時にはチンポを自らしゃぶっていた。自覚はない。その行動こそ、性欲がキュアエールの全てを支配した事を証明していた。